
「副長、土方」

リュシフェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「副長、土方」

【Nコード】

N9966D

【作者名】

リュシフェル

【あらすじ】

もしも、新撰組副長「土方歳三」が徳川家将軍の後継者だったら。また、今まで語られてこなかった「鬼の土方」の幼少期。これらを軸に展開していきます。

第一話 誕生（前書き）

はじめての歴史ものなのでどうなることやらって感じです。

第一話 誕生

「副長、土方」

リュシフェル

「神さま、神さま。ぼくは、いつまでひとりぼっちですか？」
幼少期のトシ。

「死にてえやつだけついて来い、って言うつもりだったけどよお。
生きてえやつだけついて来いっ。進めっ」

土方 歳三。

「トシ、トシ」

（どこだここは？）

「トシ、トシ」

（だれだこいつは？）

どうやらここは、大きな寺の軒下みたいだ。目の前には旅装束をした武士が立っている。多分、こいつはできる。少なくとも弱くはない。
い。

「トシ、大丈夫。私は敵じゃない」

どうやらそのようだ。

「トシ、ほら着替えだ」

（あ、おれ全裸だ）

とりあえず着替える。普通の子供用の着物だ。

「トシ、似合うじゃねえか」武士、笑う。素敵な笑顔だ。

「あの、俺の名前はトシなんですか？」

「ああ、そうか。記憶がないのか。お前は清水の舞台から、三度も飛び降りたんだ。自分が、トシが敵の手に渡らないように」そう、

武士は切なそうな顔で言う。当てよう、この武士はやさしい。

「そつか、あいからわず俺は馬鹿なのか」俺、しんみりとする。

「まあ、いいさ。トシは間違ってる。私の名は、唐沢。江戸城の剣術師範。これからしばらくトシと行動を共にする」

「なんで俺の名を？」

「有名だぞお前は。だれもがトシと行動を共にしたがる。一緒に生きていこうとする。ただ、私はちゃんと知っているんだ。お前が、トシがだれよりも孤独だということだれよりも臆病だということ」

「ふーん。そつか、唐沢君だっけ？君にはそう映るんだ。当りかな」

「まあ、いいさトシ。ここは京都の清水の舞台の軒下。これから二人で江戸城まで行かなくてはならない」

「なんでまた？」

「トシ、お前が將軍になるんだよ」

「なんでまた？」

「いいから、いいから。トシみたいなやつが將軍にならなきゃ、徳川幕府はもうおしまいだ」

「ふーん。ご期待にこたえられますように。拾ってもらったので言うことは、聞きます。俺いくつですか？」

「三つだ。まだまだ、これからだ。さあ、江戸城に出発だ」

「えー、道場？」

「江戸城だ」

以上、第一話終わり。

第一話 誕生（後書き）

もし、よろしければ続編も期待しててください。

第二話 接吻（前書き）

京都で唐沢師範に拾われ、御茶屋にいるところです。

第二話 接吻

第二話 接吻

リュシフェル

「トシ、さあ旅支度だ」唐沢師範にせかされる。

「俺、荷物無いんですけど」と俺。そりゃそうだ、少し前までは裸だったんだから。

「そうかトシ、じゃあ出発だ」とのんきな唐沢師範。

「話聞いている？」と俺。まあいいや、別に。旅支度、あー旅支度。

あつ刀がない。

「師範、俺刀がない」

「フフツいずれな。今のトシには刀は贅沢品だ」

「分かりましたよー、どうせいいですよーだ」

「トシ、腹へってないか？」やさしいね、師範は。

「だいぶ減ってます。もう俺、飯食えないものだときらめてました」

「私に任せなさい。あの店で、団子でもいただこう」と言いつつ唐沢師範、所持金を確かめる。どうやらたいして無さそうだ。団子だもんなー。すぐ近くに団子屋さん発見。どうやら御茶屋さんみたいだ。

「主人、この子に団子を腹いっぱい食べさせてやってくれ。私はいから」武士は食わなど高楊枝、地でいってるねー。

「俺も、味見程度でいいですよ」と遠慮。それに団子より刀がほしい。

「トシ、いいのかちょっとで？」と少し安心したような唐沢師範。

「いいですよちょっとで。それに俺に策がある」さあ、がんばっていこー。いつもとちがった俺で。

「主人、妻か娘さんはいますか？」と俺。

「はい、今二人とも奥で働いてますが。何か？」

「呼んでください」と頭を下げる俺。

「おーい。お侍さんが話しがあるみたいだ」

「はーい」と年配の女性。奥さんだろう。

「はーい」と十二歳くらいの娘。娘さんだろう。

「あのですね。取引がしたいのですが？」まじめな顔をした俺。

「取引？」と娘。怪訝そうな顔の年配の女性。

「俺がもし、ほっぺに接吻したら団子を無料でいただけませんか？」

さすが俺。しかもかわいく言う。

「トシ、武士のすることじゃないぞっ」唐沢師範の怒った顔を初めて見る。

「でも、俺刀も持ってないしこれじゃ武士ではないじゃないですか」
本当は刀がほしい。

「ふふ、トシ君ていうんだ。お父さんに話してみる。そのかわりほっぺに接吻忘れないでね」がんばれ娘。とりあえずお茶でもと、安堵した顔の奥さん。お茶をだしてくれた。

「お父さん良いつてさ、トシ君。そのかわり少し古くなった団子だけど」すごいぞ娘。

「全然かまわないです。団子一個で接吻？」と俺。でれでれ。

「団子三個で接吻でいいわよ」ほっぺを赤く染めた娘。

チュツチュツチュツ。

「あー、団子おいしかったです」九個も食べちゃった俺。てへ。娘さんは多分だけど、照れて奥に引っ込んだ。無然とした顔の唐沢師範。

「なあトシ、こんなことばかりしてたのか？」

「初めての試みです。成功すると思わなかった」

「もうするなよトシ。侍のすることではないからな。主人、もう出る。世話になった」立ち上がる、唐沢師範と少し遅れて俺。

「いえいえ、あんなにうれしそうな顔をする娘を初めて見ました。

お侍様も、団子を歩きながらも食べてください。お代は結構です」「すまん。重ね重ね世話になった。では」「あれ、武士は食わねど高楊枝？

「へい」と主人。ありがとな団子屋。

「トシ、すまん。ありがとう。私には所持金が少ししかない」と団子をむさぼり食いながらの唐沢師範。

「別にいいですよ。正直、お金はおっかねーですよ。ただ、どうしても江戸城の剣術師範が貧乏なんですか？」

「私は人の不幸を金で埋めたがる。ずっとそうしてきた。だから常に自分に武士は食わねど高楊枝と言いつけて聞かせている」

「それで俺の分はともかく、自分の分の団子を買う余裕もない」「すまん」口を真一文字に結ぶ唐沢師範。

「唐沢師範、俺思ってます。本物の不幸は自分が幸福だときぎずいてないんじゃないかと。俺は団子も食えたし、ひとりぼっちでもないし十分幸せです」

「そうか。トシはやさしいな」涙目になってる唐沢師範。

「それに、接吻もできたし。てへ」「さあ、いざ江戸へ。」

第二話 接吻（後書き）

もしよろしければ、続編期待してください。

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

第三話 山賊（前書き）

江戸城に向かっている道中です。

第三話 山賊

第三話 「山賊」

リュシフェル

京都から江戸城へ向かう道中分かれ道に差し掛かった。立ち止まる唐沢師範と俺。

「トシ、近道だけど危険な道と遠回りだけど安全な道どっちがいい？」

「近くて危険な道。遠回りなんかクソくれえだ」

「分かった。その言葉遣いなんとかならんか？」

「いや、俺、時と場合によって変えるから。てへ」

「まあ、いい。近道で行こう。危なくなったら私の後ろに隠れるように」

「イヤだびょーん」近道だけど危険な道、どんな道なんだろう。てくてく。峠に差し掛かった。

(前に三十人後ろに二十人ってところか。山賊か、危険ねえーおもしろくなってきた)

「トシっ後ろに隠れてろっ」抜刀する唐沢師範。

「後ろにもいるんですけど」別に焦らない俺。

「カシラ、親子づれってところです」後ろにいる山賊。

「大して金持ってなさそうだな。まあいい、やっちなまえ」多分、山賊頭。

「まてっ私も、この子も金は無い。話し合おう」俺を中心にして円を描くように動きながらの唐沢師範。多分、俺を守ろうとしているのだろう。邪魔くせえ。

「まてっ俺には刀も無い。だが、面倒くせえ、殺しあおうヒャッホー」と、唐沢師範の脇差を上手く奪う俺。ヤッホー。

「トシ？」

「唐沢師範が前の三十人、俺が後ろの二十人。役割分担、いいですね？」

「分かった。トシ、頼むから死ぬなよ」

「はい、ほーい」

「怪我もするなよ」

「へーい」この状態で怪我もするなか。言うねー。さーてはじめるか。唐沢師範と背中を合わせる。これで後ろからは斬られない。斬られないようにして斬る。とりあえず山賊の手首を斬る。一人、そしてもう一人。

「トシっ今のは籠手という」さすが師範。斬ったのは俺だけど。

「何人斬りました？」

「イヤ、まだ。トシっ刀の同じ箇所を斬るなよ。脂で斬れなくなる」

「ほい、ほーい」ならば突こう。ていつ。

「トシっ突きは邪道だ」この状況で？

「じゃあどうすれば？」

「トシ、自分で考えろっ」

「はいっ」とにかく、斬って斬って斬りまくる。だんだんと刀が脂で斬れなくなっていく。まさに言う通りだ。

「トシっ大丈夫か？」肩で息をする唐沢師範。

「はい、クソっまだいるのか山賊」だが、山賊も、もうあと十数人だ。

「トシ、あのヒゲもじゃが山賊頭みたいだ。任せろ」

「ふふん。了解」山賊頭の胸倉を掴み首に刀を突きつける。

「まてっ待て」と山賊頭。

「退くか、殺されるか。どっちがいい？」

「退くっ退く。逃げるぞ」山賊頭の命令により山賊たちがちりじりに逃げていく。

「はあー、終わった」さすがに疲れた俺。

「トシ、よくやった。私のほうが頑張ったがな」言うねー。

「じゃあ、山賊の有り金ぼったくりますか」

「トシ、私は武士だ。そんな事はできない」

「じゃあ、くたばってる山賊の金は全部俺のものということだ」

「やっぱり私ももらおう」お茶目な師範。

「残った山賊、とどめ刺しときますか？」

「トシ、武士の情けだ」

「でも、痛がってますよ」だって俺は一人も殺してない。金は奪ったが命までは奪う気はなかった。とどめは刺していなかった。多分、人から何かを奪おうとする者は奪はれる覚悟がなければ駄目だと思う。金だろすが、たとえ命だろすが。

「放っておけ」死んだ山賊たちに、手を合わせ念仏を唱える唐沢師範。これも、武士の情けか？

「師範、何か俺達の方が山賊みたいですね」

「だな。さあ、先を急ごう」

山賊に遭ったが金持ちになったお馬鹿な二人組み。さて、どうなることやら。以上。

第三話 山賊（後書き）

よろしければ続編も、期待してください。

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。

（月1回）

第四話 江戸（前書き）

江戸に向かい、着いたときの話です。

第四話 江戸

第四話 江戸

リュシフェル

山賊に遭いながらも逆に金持ちになり、とぼとぼと江戸まで歩いて来た。本当に長い道のりだった。小説だと一瞬だけど。道中、唐沢師範と俺でいろいろな話をした。それを少しだけ。

「トシ。トシは将来どんな侍になりたい？」

「うーんとね。やさしくつよく、できたらさらに、おもしろくかつこいい侍になりたい」

「優しく強くか。ということとは私みたいな侍か？」

「ハハハッおもしろい冗談を。唐沢師範、やさしいとなめられる、つよいと恐れられる。でも、俺の中ではやさしいとつよいは同じ意味を持つ言葉なんですよ」

「トシ、私に分かるように説明してくれ」

「やさしい人間と何でも言う事聞いてくれる人間とは似ていても、まったく違う人間なんですよ。やさしいの裏に芯のつよさがないと「うーん。深いな」」

「それにつよい人間と恐れられてる人間も、まったく別の種類の人間です。あいつはつよいけどやさしい、そう言われる人間を侍全員は目指さなければいけないんじゃないかと」

「そうか。トシの言う通りかもな。私も心底そういう侍になりたい」「そして、おもしろくかつこよく。難しそうだけどやりがいがありますよね？」

「要するにまとめると、トシは私みたいな侍になりたいということだな」

「ハハハッ冗談を。ただ、師範は良い侍だとは思いますが。何より俺は師範に拾ってもらったし。本当に感謝してます」

「トシ、今の私にとってはトシがすべてだ。私の方こそありがとう」

そうこうしてる間に江戸に到着。んんっガキ共に囲まれる。どうやら目当ては唐沢師範のようだ。師範、師範となつかれてる。

「トシ、私も子供達には人気があるんだ」すぐうれしそうな子供達と唐沢師範。俺も、なついちゃおっかなー。

「唐沢師範。こどもたちに人気があるのはやさしく、なおかつおもしろい人間ということですよ」

「トシにそう言ってもらえると本当にうれしい」そう言いながら子供達の頭をなで終わり、今日のところは子供達にさよならを言う。

なんだか唐沢師範は本当に子供が好きみたいだ。俺には見せたことのない寂しそうな顔をしている。

「トシ、トシは子供達を好きか？」真顔の師範。

「好きといえば好きんだけど奢ってあげられないから切ないかな」

「ふふふ。トシ、私も一緒だ。そのかわり私は時間のゆるす限り子供達に、自分と自分の大切なものを守れるように剣術を教えている。その結果、子供達は私を師範、師範と呼んでくれるようになった。

私は唯一、自分を誇れるとしたら誰よりも剣術に秀で、なおかつ丁寧に分かりやすく教えられるところだ」

と、向こうから二人の侍がやってくる。こちらに気づいたようだ。

「おい、唐沢の野郎がいるぞ。逃げたんじゃねえのか」

「唐沢、のこの何しに来た。もう、師範は辞めたんだろ」

唐沢師範の顔色が明らかに曇る。どうやら、子供には人気があるが大人にはないらしい。俺に脇差貸してくればこの二人ぐらい無礼討ちにしてやるのに。あーあ。

「この子を探していた。次の將軍様にはこの子になってもらいたい。名前はトシという。誰よりもやさしく、誰よりもつよい。こういう子が將軍様にならないと幕府はもう、終わりだ」そう言いつつ俺を後ろに隠してくれる師範。

「こんなガキが將軍様だー？唐沢、そもそもお前ごときにそんな権

限ないだろうが」二人の侍のうちの一人に怒鳴りつけられる。オーライ、無礼討ちだ。怒鳴りつけやがった侍の金玉を思い切り蹴り上げる俺。蹴り上げられた侍は泡を吹きながら横に倒れる。

「なあ、唐沢師範。武士がなめられちゃおしまいだ。ましてや、俺を拾ってくれた人が目の前で怒鳴りつけられているのを我慢するのがやさしさなら、俺はやさしくなかつていい」

「すまん、トシ」口を真一文字に結んでうつむく師範。

「ついでだっ」もう一人の武士の鳩尾に直突き。

「トシつやりすぎだ」あわててとめる唐沢師範。

「江戸か。楽しくなってきたじゃねえか。ただ、金玉の感触は最悪だ。次からは、脇差を貸してくれ師範」そんな事を言っている俺を遠めから見ていた子供達から、拍手喝采。ブラボー、ブラボー。これで俺も、人気ものの仲間入りかな？

「トシ、今のうちに城へ向かおう」

「はい、ほーい」以上。

第四話 江戸（後書き）

よろしければ続編も期待してください。よろしくお願いします。

第五話 城内（前書き）

江戸城にたどり着いたところです。

第五話 城内

第五話 城内

リュシフェル

因縁をつけてきた二人の侍を撒いて、とうとう江戸城までたどり着いた。

「トシ、やっとたどり着いたぞ。あれが江戸城だ。長かったなここまで来るまで」

「はい。唐沢師範はここで働いてたのですか？」

「ああ。ただ、江戸城で剣術師範をしながら近くの寺子屋でも無料で教えていたがな」

「俺も習いたかったな」

「トシ、トシはもう十分強いぞ」

「でへへ。」

「さあ、行こう。江戸城内へ」

「はい」

江戸城の正門に着く。唐沢師範の顔パスで城内へ入れた。すげー。すぐにご家老がやってきた。なにやら唐沢師範と話している。

「唐沢君、この子が正統なる將軍の資格者か」

「はい。強いし、やさしい。賢くておもしろい。清水の舞台にいるところを捕まえました」

「そうか、ご苦労だった。さあ、少し休んでいなさい」

「どうやら、俺のことを話してたらしい。本当に俺に將軍の資格などあるのだろうか。まだ、三歳だし。まあ、いい。なるようになるわ。」

「トシ、何を考えてた」

「かわいい女のことを。でへへ」

「本当は何を考えていたんだい？」

「もしも、もしもですよ。俺が將軍になれるのならば、何をしようかなと思って」

「大丈夫。私の推薦がある」

「だいじょうぶ？」

「多分」

「多分じゃねえかー」

「ははは、トシ。大船に乗ったつもりで」

「しかし、泥で作られて大船であると」

すると、さつき唐沢師範と話していたご家老に呼ばれる。とりあえず城内を案内してくれるらしい。將軍不在の城内は静まり返っていた。「大奥」へとつながる扉まで来た。ご家老に、この先は何があっても入らないようにと念を押される。でも、そう言われると入ってみたくなるよね？

ご家老に將軍の玉座を見せてもらう。とりあえず座ってみた。唐沢師範があわててやめさせようとするが、なんとご家老はそのままが良いと言う。やっと本物が座ってくれたと一人、感動している。しかし、一人また一人と、ほかの家老や大老、老中までもが集まって来た。みんな一様に俺の顔といる場所を見て驚いている。が、まだ誰も動けないでいた。玉座に座る俺のとなりには、殺気を放つ唐沢師範がいた。そして、ご家老が口を開いた。

「この玉座に座っているお方は正統なる將軍の継承者である。このお方を次期將軍にするか私が切腹するか、おのおの方決められよ」
抜刀する唐沢師範。のんきに、ピーチクパーチクうるさい老人たちを眺める俺。何も決まらない。みんな一様にただただ驚いている。しょうがないから俺が決めよう。

「この抜刀しているお兄さんに斬られるか、俺の話の聞くかどちらが良い？」

「ここをどこだと思っている」とひとりの大老。

「俺を誰だと思ってる。爺ばつかじゃねえか。老害という言葉をしってるかい？」と俺。影で唐沢師範が笑っている。たくつ。

とりあえず現將軍がいる場で話し合うことになった。これだけでも大きな前進だ。切腹を賭けたご家老も、抜刀した唐沢師範もとりあえず安堵していた。たくつ命がけかよ。以上。

第五話 城内（後書き）

よろしければ続きも楽しみにしてください。

第六話 大奥（前書き）

江戸城に居座つてるところです。

第六話 大奥

第六話 大奥

リュシフェル

宙ぶらりん宙ぶらりん。江戸城内でやることがない。みんな俺のことを見て見ぬふりをする。この子に將軍になる資格があるのかと。ご家老は説得にあたり、頑張っている。でも俺のために頑張っている人がいるのに自分は何にもできないのは正直、しんどい。しかも、肝心の唐沢師範は三日も子供達の顔を見てないとやっつけられないと言つて、寺子屋へ行つてしまった。たくつ。さて、「大奥」ですが誰も見てくれないなら入っちゃおつと。でへへ。

大奥につながる部屋にはとても大きな鍵がかけられていた。そして簡単に開けられた。盗人の極意。てへ。

とうとう大奥に潜入。紐でつながれた鈴がいつぱいある。ためしにゆすつてみた。割と大きな音色が鳴る。急ぎ足の足音が聞こえてくる。どこが盗人？

お齒黒に白塗りの女性達が我先にとひざまずき始める。誰も俺の顔を見ない。好都合？

「あのー、迷子なんですけど」ちらほらと思わず笑い声、そして驚きの声。だつて將軍じゃないんだもん。おののく女性達。

「ふーん。大奥つてこんなところなんだ」もう飽きた俺。

「私は大奥総取締役のものでございます。あなた様はどなたですか？」

「ただの迷子です。あのー聞きにくい事なのですが、何でそんな化粧物みたいな化粧をしているのですか？」

「そういう決まりでございます」

「普通にしていればいいんじゃない。わざわざ女をすてなくても」

「そう思われますか？」

「うん。次に俺が来るとしたら、好きなように生きてほしいな」
「かしこまりました。意見のひとつということ。本当に迷子なのですか？」

「いやー、それほどでも、でへへ」

「褒めておりません。迷子でしたら、後ろの扉よりお戻り下さい」

「はい。好きなように生きる、考えておいてくださいね」撤収。

大奥の間を出て、また鍵を閉めなおす。これも盗人の極意、かな？

「トシさん。どこへ行つたのですか？」ご家老に見つかる。

ちなみにこのころ俺はご家老には「トシ」に敬称の「さん」を付けて「トシさん」と呼ばれていた。

「ちよつと大奥まで。でへへ」正直な俺。

「トシさん。入らないで下さいと言つておいた筈ですよ」

「すいません。宙ぶらりんすぎて、だつて誰も相手してくれないんだもん」

「分かりました。しょうがないですね。明日にも上様が来るとの事です。お見知りおきを」

「はい、ぶつ飛ばせばいいんですよね？」

「お好きなように。トシさんには自由が良く似合います。ご自由に」ご家老が退席し、唐沢師範がやって来た。もうすぐ將軍がやって来るといふことでさすがに顔が引き締まっている。

「トシ、上様が明日にも来るといふ話だが」

「ご家老に聞きました。それより唐沢師範、大奥に行つて来ました」
「トシっ本当か？どうなつていた？」

「それは言えません、でへへ。ただ、あの人たちも自由に生きられたらなとは思いました。今度、機会があつたら一緒に大奥行きますか」

「それもいいなー、トシ。明日を乗り切れたらな。私も、頑張つてみるからな」

「はい、ほーい。唐沢師範、もし駄目でそれでも生き残れたら、お

互い自由に生きていきましょー」

「分かった。トシが言つと自由は良い響きだな」

「いやー、それほども。でへへ」

勝手に江戸城内に居座り自分には將軍の資格があると言つ。しかし、とうとう上様が来るといふ。さて、どうなることやら。以上。

第六話 大奥（後書き）

よろしければ続編も、楽しみにしててください。

第七話 将軍(前書き)

ただの孤児がとうとう将軍に謁見してとこころです。

第七話 將軍

第七話 將軍

リュシフェル

とうとう將軍と謁見する日の朝がやって来た。ひとりぼっちのところを唐沢師範に見出され、拾ってもらい江戸城までやって来た。そしてご家老の奮闘があり今日という日を迎えた。それは、とてもとても有り難いことではあるのだけれど正直、面倒くさいよね？だって將軍になりたいなんてひとも言っていないんだもん。あーあ、面倒くせえ。切腹か？打ち首になるか？あーあ。

ご家老と唐沢師範に伴われて、玉座に座る。隣に殿中でありながら帯刀する唐沢師範。評議の場に移るご家老。そして当たり前のように上座に座って將軍を待つ俺。そこに侍の格好をした太ったおっさんがやって来た。

「上様のおなーリ」こいつが將軍か？とても、そんな風には見えな。格好だけが立派で、威厳もないし強そうにも見えない。なんだか俺が江戸城に来なきゃいけない理由が分かった気がする。これじゃあ、幕府は持たない。でもなー、いまさら立て直すのもなー。

「余の偽者が出たとの事だが、余は寛大じゃ。よきに計らえ」との將軍の言葉を得て家臣達が胸を撫で下ろし、俺のことをどうするか話し始める。將軍は寛大だと言いながら、切腹だの打ち首などの言葉が飛び交う。

「ブタさん、俺を見ても何とも思わないのか？」俺が誰のことを話しているのか分からず、一同静まり返る。

「ブタ將軍さん、てめえだよ。何でお前が將軍なのか分かるか？」あまりの発言に家臣達も、顔が青ざめる。

「ブタとは余のことか？余が誰だと思っっているっ。せっかく切腹で

すましてやろうと思ったが、もうよい打ち首じゃ」

この將軍の発言を受け家臣達が俺を捕まえようとするが、すぐさま抜刀した唐沢師範の殺気でなかなか動けない。

「ブタ將軍さん、顔がてかてか光ってるブタ將軍さん。俺に喧嘩で勝てたら打ち首でいいよ」今度はご家老の顔が青ざめる。

「トシさんついくらなんでもその条件はっ」やさしいやさしいご家老さん。

「ご家老、その条件で大丈夫ですよ」ふふつと笑う唐沢師範。そうですね、山賊と戦っていたときよりはましですね。

「余の刀を。余に勝てると思ってるのか？」

「俺は素手でいいですよ、ブタさん。すぐ始めますか？」

「斬る前に聞きたい、歳はいくつじゃ？」

「三歳。漢字を入れ替えて、あだ名は歳三トシさん。いや、歳三としぞうにしようかな」

將軍が右袈裟切りで切りかかってきた。これを避けると右脇腹がから空きになる。そこに体重と渾身の力を込めた左ボディック。

たまらずうづくまるブタ將軍さん。一同、目を見開く。

「トシ、さすがだな」と唐沢師範。そして何度も、うなずくご家老。やっと我に返った將軍の家臣たちが、上様と言いながら將軍のもとに集まる。あとはこいつらだけか！

「トシさんつあとは私と唐沢君とでやります。任せてください」と涙目になるご家老。うれし涙だったら素敵だな！

評議の結果、とりあえず俺は次期將軍の資格を得ることとなった。ブタ將軍さんと家臣達は、ご家老の三歳の子供にしかも素手対刀で負けるやつに、將軍どころか侍の資格はあるのかと押し切られたらしい。すぐにでも將軍にとの声もあつたらしいが、俺の歳が三歳ということでそれは見送られたらしい。やったー、これで気兼ね無く江戸城にいられるぞ。ちなみに唐沢師範は、トシすぐにでも「大奥」

よ。に行じつと張り切っている。たくっ。ちんぎんなめじつとせら。以

第七話 將軍（後書き）

続編も楽しみにしていただけたら、幸いです。

第八話 君臨（前書き）

江戸城にとどまってるとうろです。

第八話 君臨

第八話 君臨

リュシフェル

將軍をぶっ飛ばし、次期將軍の資格を望みもしないのに手に入れた。それなのに、俺を拾ってくれた唐沢師範は、あいからわず江戸城外の寺子屋に通っている。あいからわず子供好きらしい。俺の後ろ盾となってくれたご家老はというと江戸城内での説得にあたり、徐々にはあるが俺の味方になってくれる人を増やしてくれている。最近では俺は玉座に座り、將軍抜きで評議にあたりたりもする。でも、俺まだ三歳だよ？こんなんでいいのかな？ちなみに俺の呼ばれている名前は年齢の三歳を逆にして、歳三としさんとか歳三としぞうとか適当である。なんだかなー。もともとは「トシ」と唐沢師範に呼ばれていたから、まあ漢字になったただけでもいい感じかな。

將軍の玉座に座る。もうこの頃になると俺が玉座で相談事を持ち込まれるのが当たり前になっていた。そばにはご家老がいて、いちいち相談事の背景を説明してくれる。

例えば薩摩藩がのらりくらりとなかなか幕府の言う事を聞かないことについて、俺の答えられる範囲で答える。実は薩摩の島津家は幕府にとって時限爆弾であると。徳川幕府が求心力を失ったときに爆発する時限爆弾で爆発しないために將軍が何をできるか考えろと答えた。しかし、將軍は俺にぶっ飛ばされて以来、姿を見せない。なので仕方なく俺が玉座に座っている。今こそ、將軍が指導力を発揮するときなのに。

周りが動いてやっと將軍がやって来た。

「私は上様であるぞ。控えろっ」声が震えている。

「てめえつ上様の意味知っているのか？」

「私の上だから上様じゃ」

「違えよ。上杉様を省略して上様だ」

「何を根拠にそんなことを」

「将軍が上様と呼ばれるようになったのは八代将軍からだ。俺がそう呼ばせた」

「吉宗公？」

「ああ、過去の俺だ。それ以来、八は吉数になった。お前と俺、どっちが将軍にふさわしいかな？」

「私は将軍だ」

「ああ、知ってるよ」

「だから、偉いのだ」

「三歳のガキにぶつ飛ばされるやつがか？」

「帰る」こんなもんです。

「ごほうごほう」

「ご家老、あんまり良い咳じゃないな」

「そんなことより、トシさんっ吉宗公だったのですか？」

「昔な。周りがどうしても将軍になってほしかったらしい。ほかの将軍候補を暗殺してもな」

「暗殺？」

「ああ。今はもう、目安箱は置いてないのか？」

「読むのが大変すぎるとかで」

「多分、政とは面倒くさいことを面倒くさがらずにやることだと思う。俺が上杉謙信だったころは領土をくまなく見てまわったんだけどな。そのうえで戦を無意味だと判断した。自給自足ができたからな」

「ごほうごほう」

「ご家老、少し休んできなさい」

「しかし、まだトシさんの話を聞いていたい」

「いいから。俺は唐沢師範と遊んでくるから」
「分かりました。では少しだけ休ましてもらいます」

たまには江戸城の外に出てみるのもいいもんだ。唐沢師範のいる寺子屋に行く。あいからわず子供が大好きらしい。

「すいません、トシといます。唐沢師範に会いに来ました」

「はい」すぐに案内される。子供に刀の使い方を教えてるところだった。

「トシ、どうした？トシも、遊んでいかないか？」

「唐沢師範、残念だけど家老はもう持たない」

「どういうことだっ」

「もう、寿命だろう」

「どうすればいい？」

「それを話に来たんです。正直、あの人がいなくなるなら、俺が江戸城にいる意味もなくなる」

「トシっすぐに江戸城へ」

「はいっ」さて、どうなることやら。以上。

第八話 君臨（後書き）

よろしければ続編も、期待していただきたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9966d/>

「副長、土方」

2010年10月10日10時23分発行